

# 研 究 結 果 報 告 書

## 国木田独歩の作品の考察：ジェンダーの視点から

所属：タマサート大学 教養学部 日本語学科

役職：講師

氏名：ウィリヤエナワット・ピヤヌット

本研究では、国木田独歩の四つの作品（『女難』、『竹の木戸』、『鎌倉婦人』、『第三者』）の再考察を試みた。独歩は元の妻である佐々城信子を意識し、『女難』、『鎌倉婦人』、『第三者』における女性の主要人物を創作したというように読まれてきた。だが、ジェンダーの視点で作品を検討した結果、新たな側面が浮き彫りになった。まず、『女難』では、女性たちの登場人物は自分が思うままに身勝手な行動をし、男性の主要人物より優位に立っていることがわかった。また、これらの女性たちの登場人物は明治時代における「良妻賢母」という女性のイメージと異なることも明らかになった。一方、男性の主要人物は意志が弱く、女性のような弱々しい面を持つ。災難に見舞われたのは、自分が男性らしい振る舞いを示せず、問題を解決できなかったためである。

さらに、家庭と貧困問題が描かれた『竹の木戸』の男女の役割においては、未婚か既婚かにかかわらず、女性登場人物は揃って金銭問題を重視し、家庭内の問題に取り組んでいる。対照的に男性登場人物は家族の問題に対処できず、「黙っている」家長の姿が浮上してくる。このことは同じ「盗み」というモチーフ及び貧困家庭であることが描かれている独歩の『酒中日記』と比較すると、一層顕著である。すなわち、両作品は弱い家長と対照的に権力を見せる女性たちの物語である。ここで注意したいのは、弱い家長の性格を描写するため、両作品において「愚図愚図」という言葉が使用されていることである。彼らは結局自分の家族を救えず、妻が自殺する点でも共通している。

最後に、「恋愛問題」をテーマにした、『鎌倉婦人』と『第三者』の男女の登場人物について再検討をしてみた。両作品は書簡体の小説であり、一見「毒婦」や「女ほど不思議な動物は無い」などという言葉などの使い方から、女性を批判する作品であるように見えるが、恋愛の理想にとらわれる男女の物語とも読み取れる。とりわけ、男性の登場人物は女性の登場人物と恋愛観が異なる。彼らは恋愛を崇拝し、『第三者』の主人公と同様にまともな生活ができず、結果的に自殺に追い込まれる。両作品は独歩自身の実体験を素材にしたものであると読まれがちであるが、ここでは当時の青年の恋愛観に対する独歩の批判も読み取れるといえよう。

## 研究成果の公表について

口頭発表 （題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

1. 題名：「国木田独歩の『女難』における男女像の考察」  
発表者名：ウィリヤエナワット・ピヤヌット  
会議名：「第9回タイ国日本研究学術大会」(The 9<sup>th</sup> Annual Conference of Japanese Studies Association in Thailand)  
日時：2015年12月17日  
場所：Centara Grand Hotel, Songkla, Thailand (タイ)
2. 題名：「国木田独歩の『竹の木戸』における男女像の再考察」  
発表者名：ウィリヤエナワット・ピヤヌット  
会議名：「BALI-ICJLE2016 日本語教育国際大会」(BALI-ICJLE2016 International Conference on Japanese Language Education)  
日時：2016年9月10日  
場所：Bali Nusa Dua Convention Center, Indonesia (インドネシア)

論文 （題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

1. 題名：「国木田独歩の『女難』における男女像の考察」（タイ語）  
発表者名：ウィリヤエナワット・ピヤヌット  
論文掲載誌：Japanese Studies Journal  
掲載時期：2016年6月8日 (pp. 47-60)
2. 題名：「国木田独歩の『竹の木戸』における男女像の再考察」（タイ語）  
発表者名：ウィリヤエナワット・ピヤヌット  
論文掲載誌：JSN Journal  
2016年12月1日 (pp. 21-33)

書籍 （題名・著者名・出版社・発行時期等）